

## 民主政治の土台が崩れる

参院選について様々な角度からレポートしているが、今回は投票率である。参院選の結果について、改憲派3分の2届かず、与党過半数、「れいわ」の2議席など、多くの特徴が指摘できるが、何といても投票率の低さが気になるところだ。最まずは投開票日21日の朝日新聞社説の中ほどから

棄権が増えれば、強固な組織票を持つ政党や候補者が有利になり、そうした組織の意向が政治に反映されやすくなります。棄権は「沈黙」です。現状が認められた。白紙委任された一。政治家は勝手にそう解釈するかもしれません。その結果、意に沿わない政策を後から押しつけられてしまう可能性があります。自治体の首長や議員なら解職を請求できますが、国会議員にはできません。ブレーキがなかなか利きにくいのです。それでも、棄権する覚悟がありますか。棄権は「責任放棄」でもあります。子や孫の世代に膨大なツケを回し続ける。日々、電気を使うのに原発問題には知らん顔をする。いまを生きる私たちが、しっかり考え、意思表示をしないのは無責任すぎませんか。憲法前文には「国政は、国民の厳粛な信託による」と書いてあります。棄権は、この大事な「信託」をないがしろにする行為ではないでしょうか。

投開票後23日の毎日新聞23日の標題社説から(写真も同紙)。これは極めて危機的な状況だと国民全体で受け止めたい。

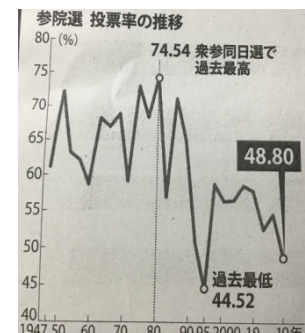
参院選の投票率(選挙区)は48.80%にとどまり、史上2番目の低い数字となった。九州を直撃した大雨が影響したのは確かだが、5割を切ったのは過去、1995年の参院選(44.52%)だけだ。

深刻なのは安倍晋三首相が自民党総裁に返り咲いて以降、今回も含めて計6回の衆院選と参院選の投票率はいずれも60%に達せず、低投票率がもはや常態化していることだ。

有権者の半数程度しか投票しない中で国民の代表が決まり、政治を動かしていく。議会制民主主義の土台が崩れ始めていると言っている。

国民の興味や関心をそいでいる責任はもちろん、与野党双方にある。「安倍一強」体制の下、自民党内にはかつてのような活発な議論はほとんどない。「ポスト安倍」の顔もなかなか見えない。対する野党は旧民主党政権の失敗が今も尾を引き、国会でも力不足が続く。そんな中で毎年のように国政選挙が行われる。

多くの有権者は「投票しても政治は変わらない」と最初からあきらめているのかもしれないし、選挙そのものに飽きているのかもしれない。



(2019年7月24日)